

キユツ、キユツと、床を踏む音。ネットを挟んでシャトルを打ち、シユツと空気が切り裂かれる音。まだ冷え込みの厳しい3月の昼下がり、秋田県立体育館は徐々に熱気を帯びていく。

競技人口が激減しているスポーツ界にあって、この10年、約10万人もの登録人口が増えた競技。それが、かつてオグシオ人気で沸いたバドミントンだ。小中高でバドミントンに打ち込む生徒が増えた一方で、大企業のバドミントン部さえ廃部していく現実——。他のスポーツと同様、バドミントン競技もまた、社会人スポーツの厳しさを抱えている。

「どんなスポーツも、厳しい環境の中でやっている。平昌オリンピックで金メダルを取った、さあ4年後はどうしますか、なんてテレビではメダリストにマイクを向けて聞くけれど、競技を続けていくことがどんなに大変なことか。どれだけの人に支えてもらって

できることか。みんなに応援してもらえなければ、競技を続けていくことなどできない」

秋田のバドミントン界を

けん引する北都銀行においても、競技環境は厳しい。練習場の確保は難しく、秋田市内の体育館

を転々とする日々。選手は仕事をしているため、他企業のバドミントン部に比べ、練習量は年間数百時間も少ない。その一方で、ジュニアクラブの指導や特別支援学校での教室開催など地元とのつながりを大切にする。その中であって、ナショナルチームに5人の選手が選抜された。

「勝つということは、大変なこと。本人の努力だけではどうにもならない。勝つためには感謝の気持ちが必要で、それが勝つための動機付けにもなる。地元の人に応援してもらいながら、どれだけのことを犠牲にしてやれるか——。この雪の多い地方にあって、世界のトップになれるはず」

指導者となって29年。常に念頭にあるのは、フランスの元サッカー代表監督の「我々は学ぶことをやめたら、教えることをやめなければならぬ」という言葉だ。情報を収集し、知識を得て、常に学びながら最新の技術、戦術を模索する日々は続く。

「日本のバドミントン女子のレベルは、世界のトップ水準。日本一になるといことは、世界一のレベルになるということ」

国体優勝、そしてリーグ優勝へ。東京オリンピックでのメダル獲得へ。カウントは着実に刻まれていく。



秋田で世界一になる。

日本バドミントン協会 ナショナル強化部長
北都銀行バドミントン部総監督

原田 利雄さん

【プロフィール】1963年能代市(旧ニツ井町)生まれ。ニツ井高校、日本大学卒業。指導者としてNTT東北、七十七銀行バドミントン部、秋田県バドミントン協会強化部長等を経て、2008年から北都銀行で指揮を執る。07年秋田わか杉国体バドミントン競技総合優勝、07～09年国体3年連続準優勝、17年スーパーシリーズファイナル女子ダブルス優勝を導く。現在、日本バドミントン協会理事、同ナショナル強化部長、秋田県バドミントン協会理事長、北都銀行バドミントン部総監督。



17年愛媛国体で成年女子優勝、総合成績3位



リーグ最終戦の表彰式を終えて